

「国宝よりも大事なホトケさま」

美博の織田さん、『古雅拝礼』出版

飯田下伊那の谷巖に眠るホトケさまにもう一度新しい光をあてよう」と本紙で「古雅拝礼」の連載がスタートしたのが2006年5月。著者は、飯田市美術博物館の日本仏教美術史が専門の学芸員の織田顕行さん（39歳）。仕事として接している伊那谷の仏像・仏画について、もつと広く市民に知ってもらおうのが仕事とはいえ、本業の合間を縫っての執筆は月1

回が限度だった。連載が始まって半年後くらいから「あの連載は本になるのか？」という問い合わせが入るようになった。年輩の方々はばかりでなく、電話の向こうの声は、若い女性の声も混じっていたのが、いつもと違う。ようやく連載の着地点がみえてきたのは昨年2011年暮れ、そして、連載開始から6年目にしてようやく1冊の本『伊那谷の古

雅拝礼・仏教美術をめぐる55のエッセイ』が刊行された。

その序に、織田さんは次のように書いている。「お世辞にも美しいとはいえない、村落の小さなお堂に祀られた素朴なホトケさま。／けれど、それらは里人たちのさまざまな想いが詰まったかけがえない宝である。惜しむらくは、その多くが永年の歳月を経て痛々しいお姿をしていることである。修復をしてあげたいけれど小さな集落ではそんなお金も捻出できないし、修理をどう段取りするのかもよく分からない。国宝や重要文化財には国家の後ろ盾があるけれど、村落にまつられる大半のホトケさまは



伊那谷の寺社を研究調査中の織田さん

何の後ろ盾もたない。／それでも自分たちで村のホトケさまを守っている。その人たちがいる。その人たちが大事ならば、国宝よりも大事なものだ。そういう人たちと一緒に村のホトケさまを調査し、なかには思わぬ発見があったりして、みんなと喜びをわかちあおう。（後略）」。ここに織田さんの谷のホトケさまに向かう真摯（しんし）な姿勢が読み取れる。実際、6年間にわたる彼

の思索の跡を、彼の言葉を追いながら1頁1頁、編集を進めていく作業は楽しく、新鮮なものだった。学術用語ではない、平易日常の言葉で語られる仏像の見方や感じ方も好感がもてた。

時に、山里の神社仏閣から仏像や仏具の盗難・流失も問題になる世の中である。そうした意味でも、集落の人々が守ってきた「隣の仏像」を捉え直すいいきっかけがもたらえた



出版された本の表紙

のではないかと思っている。本書は菊判一四四頁、定価1890円（税込）。平安堂書店及び美術博物館、瑠璃寺、南信州新聞社などで扱っている。（嶋）